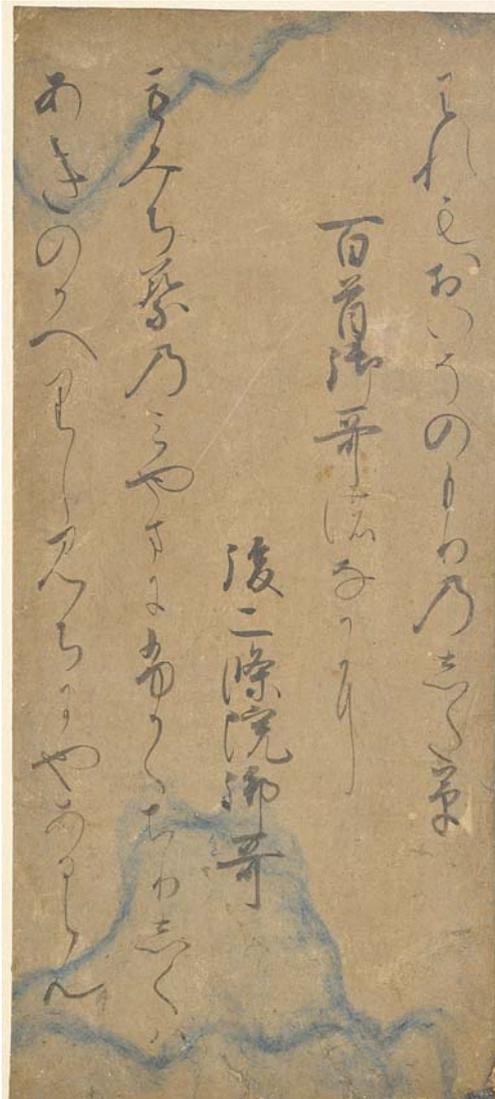


第 128 回貴重書展

中世の学芸

-勅撰集・軍記・目録-



鶴見大学図書館

平成 23 年 6 月 2 日 (木) ~ 6 月 21 日 (火)

「中世の学芸－勅撰集・軍記・目録－」展観にあたり

本学は、間もなく創設50周年を迎える日本文学科を中心にこれまで、和歌・物語・軍記等の古典籍を重点集書目としてきた。もちろん、その他の分野や近現代の洋装本にも目を配ってきたが、図書館学を重要な柱とするドキュメンテーション学科が7年前に新設されて以来特に、古典書誌学全般に関わる書物の収書にも、力を注いできたところである。

今回の展示は、折しも6月4～5日に本学で開催の中世文学学会のシンポジウム「断片から探る中世文学研究－佚文・断簡および目録と中世文学研究－」に呼応して、「中世の学芸－勅撰集・軍記・目録－」という標題のもと、勅撰和歌と軍記の断簡に目録類を加えて本学図書館の貴重書を展示した。文学部創立30周年の前後から収集してきた、各勅撰集の奏覧時や成立時に近い時期に書写された本の切れの内、なるべく中世に関わるものを選んでみた。また、恐らくは現時点で最大のコレクションかと思われる『平家物語』の長門切を、大ぶりの本の原姿を想像していただきたく、あえて所蔵の全葉を並べてみた。その結果、スペースを追いやられたかっこうの目録類も、密かに自負する三点である。

今回の展示は、企画から解題の作成に到るまでの全てを、図書館の全面的なご協力を得て、文学部の高田信敬氏と久保木秀夫氏がこれに当たった。内輪誉めになるが、一人当千の強者が二人、何とも頼もしい限りであった。しかしまた当然のこと、解題にお気づきの点などがあれば、ご批評いただけると幸いである。

文学部 中 川 博 夫

中世の学芸—勅撰集・軍記・目録—

* = 個人蔵

I 勅撰集の古筆切

- | | | | | | |
|------|------------|---------|-----|---------|----------|
| 1 | 新古今和歌集断簡 | 伝高倉清範筆 | 西山切 | 鎌倉時代中期写 | 軸装 1 幅 |
| (参考) | 定家八代抄断簡 | 伝藤原為家筆 | 四半切 | 鎌倉時代中期写 | 軸装 1 幅* |
| 2 | 新勅撰和歌集断簡 | 伝二条為氏筆 | 四半切 | 鎌倉時代後期写 | 軸装 1 幅 |
| 3 | 続拾遺和歌集断簡 | 伝京極為教筆 | 伊勢切 | 鎌倉時代後期写 | 台紙貼 1 葉* |
| 4 | 続後拾遺和歌集断簡 | 伝定為筆 | 四半切 | 南北朝時代写 | 台紙貼 1 葉* |
| (参考) | 二八明題集断簡 | 伝二条為右筆 | 四半切 | 南北朝時代写 | 台紙貼 1 葉* |
| 5 | 玉葉和歌集断簡 | 伝後醍醐天皇筆 | 四半切 | 南北朝時代写 | 軸装 1 幅 |
| 6 | 風雅和歌集奏覧本断簡 | 尊円親王筆 | 卷物切 | 南北朝時代写 | 台紙貼 2 葉 |

II 軍記の資料

- | | | | | | |
|------|---------|---------|-------|---------|----------|
| 7 | 異本平家物語 | 伝世尊寺行俊筆 | 長門切 | 鎌倉時代末期写 | 台紙貼 11 葉 |
| (参考) | 八幡愚童訓断簡 | 後崇光院筆 | 大四半切 | 室町時代前期写 | 台紙貼 1 葉* |
| 8 | 平家物語 | 零本 | 卷一・二存 | 室町時代末期写 | 袋綴 2 冊 |

III 目録をめぐって

- | | | | | | |
|----|---------|----------------|-------|----------|---------|
| 9 | 本朝書策目録 | 無注本 | 江戸時代写 | 宝玲文庫旧蔵 | 卷子本 1 軸 |
| 10 | 五合書籍目録 | 平安時代末期～鎌倉時代初期写 | | | 卷子本 1 軸 |
| 11 | 高山寺聖教目録 | 享保 8 年(1723) | 常暎写 | 高野山明王院旧蔵 | 袋綴 2 冊 |

解題

I 勅撰集の古筆切

1 新古今和歌集断簡 伝高倉清範筆 西山切 鎌倉時代中期写 軸装1幅

白斐紙（縦16.5、横9.7糎）7行、卷十羈旅900・901を写す。原態はやや小ぶりの四半列帖装、毎半葉10行程度の2冊本であったか。時折金銀泥の下絵を持つ断簡に出会う。これは後代の加飾にかかり、見栄えをよくし商品価値の向上をねらった作為。

『新撰古筆名葉集』藤原清範の項「石山切 六半新古今歌二行書（下略）」に相当するが、『藻塩草』の付け札に従って「西山切」と呼ぶ。西本願寺本三十六人集伊勢集・貫之集下を分割した石山切と区別するためにも、そのほうが便利であろう。伝称筆者高倉清範（?～1211～）は『明月記』にもしばしば登場する能書で、その息女に河内本『源氏物語』夢浮橋書写を依頼された禅尼がある。

ここで、中世の歌書を行分けと上下句との対応から見ると、和歌を2行書きする場合、1行目を上句、2行目を下句に振り分けるのが通例である。各行が上下句に対応しない書きぶり、たとえば掲出の断簡第1首目のように上句の「なり」が2行目冒頭に書かれるのは、鎌倉時代初期までの書写様式とされ、これを根拠に書写年代を引き上げる説も出されている。しかし西山切のような小型の切・写本では、時代一般の様式から離れた作例もしばしば検出されるので、しばらく鎌倉時代中期写としておく。

正式の極札ではないが、楮紙片（縦8.2、横2.3糎）に「南家高倉清範正筆」と墨書。箱書は貞政少登本学名誉教授（前独立書人団理事長・日展審査員）にお願いした。

(参考) 定家八代抄断簡 伝藤原為家筆 四半切 鎌倉時代中期写 軸装1幅*

白斐紙（縦24.2、横15.4糎）に卷十一恋一844～847（上句）を11行書き。手沢・綴じ穴痕から、列帖装のウラ面に相当しよう。極札「為家卿〔琴山〕」が付属する。古筆家初代了佐か。ウラ面「在原元方」の文字が見える。鎌倉時代中期写と推され、『定家八代抄』最古伝本資料の一つ。鎌倉時代に遡る『定家八代抄』の古筆切は数種見つかっており、『古筆学大成』にも紹介されるが、掲出断簡のツレを聞かない。徳川美術館に卷十八の零本1軸が存し、卷末に古筆了佐の筆跡で藤原為家（1198～1275）筆と極められ、別手ではあるが酷似する書風を持つところ、注目される。

八代集より約1800首を抄出、『新古今和歌集』の部立に倣う20巻の秀歌撰。建保3年（1215）正月より同4年正月の間に完成したか。掲出断簡は上下2冊に写したものの下冊が分割されたのであろう。藤原定家（1162～1241）の嗜好や歌集・歌人の評価を知る上でも重要な資料である。

2 新勅撰和歌集断簡 伝二条為氏筆 四半切 鎌倉時代後期写 軸装1幅

斐紙（縦23.1、横13.9糎）に卷十七雑二1175・1176を8行に写す。中央部分縦方向に折り目があるけれども、折本・袋綴本の類ではなく、原態は列帖装。古筆了音（1674～1725）の極札に「癸巳九」とあるのは、正徳3年（1713）9月鑑定の謂。『新撰古筆名葉集』二条為氏の項「同（四半） 新勅撰歌二行書」に相当するものである。

縦長の流麗な書風は古筆家の言う為氏流であるが、為氏（1222～1286）と同時代か、やや下の時期の資料と思われる。藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』28に掲載される断簡がツレ。

3 続拾遺和歌集断簡 伝京極為教筆 伊勢切 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉*

雲母摺下絵斐紙（縦24.5、横15.6糎）に卷十八雑下1247（下句）～1250（詞書）を8行書写。嘉右衛門の極札「為教卿 [印]」を添える。土坡・水草・鶉等を刷った下絵が特徴であり、伝藤原頭輔筆鶉切（『古今和歌集』）・伝津守国夏筆長尾切（『続後撰和歌集』）等と共通する意匠は、元代の装飾料紙を模したもの。雲母ではなく茶色の焼唐紙風下絵や蠟箋を狙った装飾も見られ、鎌倉時代後期の特色ある古筆切といえよう。『新撰六帖題和歌』を写した色変わり料紙卷子本にもこの種の下絵が施される（『一誠堂創業九十周年目録』）。

掲出の断簡は『新撰古筆名葉集』津守国冬の項「伊勢切 四半続拾遺歌二行書キラ画アリ」に相当し、伝称筆者を京極為教（1227～1279）とするのは珍しい。もっとも近衛家瀬（1667～1736）は『大手鑑』の極めに津守国夏（1288～1353）と記しており、認定に揺れがあった。『為教集』の切に伊勢切と同じ鶉の下絵を持つものがあると言われる（春名好重『古筆大事典』）ので、伝承筆者の由来は『為教集』あたりにあるのかもしれない。

4 続後拾遺和歌集断簡 伝定為筆 四半切 南北朝時代写 台紙貼1葉*

厚手楮紙（縦24.3、横16.3糎）に卷十五雑上1005～1007を8行書写。ツレには毎半葉9行のものがあるので、左端の紙の荒れは1行分削り落とした痕跡であろう。1008詞書「葵をよめる」と作者名「前大納言基良」を消し、古筆切としての外観を整えたのである。極札裏の「栄」墨印は古筆家2代了栄・3代了祐に共通するが、「定為法印為氏卿息ノせきかくる [琴山]」とある掲出断簡附属の札は2代のもの。

名葉集の類に該当する切は見えないようであるけれども、『古筆学大成』11にツレ2葉が紹介される。為氏息定為（～1326?）の筆跡資料「詠百首和歌」1巻（静嘉堂文庫）とは別筆、定為と伝称されるツレ以外の古筆切とも一致しない。南北朝期定家様の一典型。

(参考) 二八明題集断簡 伝二条為右筆 四半切 南北朝時代写 台紙貼1葉*

斐楮混漉きと思われる料紙（縦26.6、横17.6糎）に『二八明題集』秋部月1917（下旬）～1920（作者名）を8行書写。右端に綴じ穴痕が見え、原態は列帖装、丁のオモテ面と知られる。『新撰古筆名葉集』二条為右の項「集未詳 歌二行書ウタノ頭ニ集ノ名アリ」がこれであろう。

為右の筆跡かどうかは確かめていない。掲出の断簡は、書風から推して為右よりやや早い時期の書写と思われ、そうであれば『二八明題集』は、まさしく十六番目の勅撰集『続後拾遺和歌集』成立後、『風雅和歌集』以前に編まれたものであろう。当該歌集は、先行する『二八明題抄』に刺激されて、より大規模な類題集をめざしたもの（田中登『古筆切の国文学的研究』第三章）との説がある。現存20葉程度か。なお伝称筆者為右は、応永7年（1400）11月尋常ならざる死を遂げた（小川剛生「為右の最期」『日本古典文学会々報』132）。

5 玉葉和歌集断簡 伝後醍醐天皇筆 四半切 南北朝時代写 軸装1幅

斐紙四半切（縦24.5、横14.4糎）8行書写。卷十八雜五2508～2510（詞書）に相当し、吉田兼右本と異同はない。付属の桐箱蓋裏に「後醍醐天皇」と墨書した素紙片（縦11.6、横2.0糎）を押す。

古筆名葉集の類に記載を欠く切。『古筆学大成』11にツレ1葉を掲げる。闊達で速度感のある書風は、伝称筆者を同じくする『拾遺和歌集』香具屋切と似ており、このような書きぶりの断簡を、古筆家は後醍醐天皇に帰したのであろう。後醍醐天皇宸翰とは言えないが、時代相応の鑑定ではある。伝京極為兼筆長柄切と共に、『玉葉和歌集』本文資料中屈指の古さを誇る。

6 風雅和歌集奏覧本断簡 尊円親王筆 巻物切 南北朝時代写 台紙貼2葉

上下に藍内曇装飾を施した斐紙2葉、いずれも卷八冬の歌を5行に写す。伝来上何か問題があったらしく、惜しいことに料紙表面に荒れが認められる。726（下旬）・727を収める断簡（縦27.3、横12.1糎）は、728・729（作者名）断簡（縦26.9、横11.9糎）より保存状態良好。2葉ともに嘉右衛門の極札を有し、「伏見院〔院〕」と鑑定するが、鎌倉時代を代表する能書伏見天皇（1265～1317）の筆跡ではなく、その皇子尊円親王（1298～1356）の手になる。高級料紙を贅沢に用いた清書本。

尊円親王が『風雅和歌集』の「正本」を書写したことは、『看聞日記』永享7年（1425）8月27日条に明らかであり、その記事と密接に関わる卷十七雜下断簡1葉・掲出の冬歌断簡2葉・同じく冬歌断簡のツレ2葉、さらに竟宴に使用された真名序と卷一末尾部分が伝存。勅撰集の清書正本が残ることはきわめて稀であり、筆者の判明する点でも学術的価値の高い古筆切。すでに丁寧な紹介が備わる（石澤一志「尊円親王筆『風雅和歌集』正本の断簡」『国文鶴見』37）ので、参照されたい。

II 軍記の資料

7 異本平家物語 伝世尊寺行俊筆 長門切 鎌倉時代末期写 台紙貼 11葉

新撰古筆名葉集・行俊の項の「平家切 巻物平家物語上下横卦アリ」に該当。古筆本家伝来手鑑『藻塩草』付箋に従い長門切と通称される。縦約30糎のもと卷子本。天地に薄墨の界線あり、界高ほぼ27.3糎。

平家物語のいわゆる読み本系諸本に属し、特に源平盛衰記と近似する一方、延慶本や長門本、また内閣文庫蔵「頼政記」などと一致するところもあり、さらに独自異文もしばしば見出されるという。模写を含め、現在56葉の存在が指摘されている。松尾葦江『軍記物語論究』（1996年）及び『國學院大學で中世文学を学ぶ2』（2009年）参照。うち11葉が当館に所蔵され、最大のまとまりとなっている。源平盛衰記と比較する形で、内訳を示すと次のとおり。

イ「詔を致に…」巻16三井僧綱被召附三井寺焼失事、縦30.3、横11.0糎。

ロ「逃籠たりけるか…」巻17始皇帝燕丹並咸陽宮事、縦29.7、横11.0糎。

ハ「つかはさむと…」巻18文覚清水状天神金事、縦30.2、横13.2糎。

ニ「魂を消す…」巻26祇園女御事、縦30.5、横7.0糎、紙背に薄墨界罫あり。

ホ「先立たる…」巻27信濃横田川原軍事、縦30.1、横11.2糎。

へ「れは木曾は…」巻27源氏追討使事、縦29.9、横12.5糎、朱合点あり。

ト「名乗て…」巻27粟津合戦事、縦29.3、横12.6糎、界高27.0糎。

チ「けり又舞前とも…」巻27屋島合戦附玉虫立扇与一射扇事、縦30.6、横15.0糎。

リ「ゑ仕候まし…」同上、縦30.3、横16.9糎。

ヌ「ありけれとも…」同上、縦30.6、横10.3糎。

ル「たるは時に…」巻未詳、縦30.5、横10.3糎。

これらは全文一筆ではなく、数筆の寄合書であるとみられる。その分別は容易ではないが、少なくとも巻27屋島合戦に属するチリヌの3葉は同筆ではなかろうか。ここで注意されるのは、他本に見られない独自異文が記載されており、従って巻未詳と扱われてきたルの筆蹟がまた、それらチリヌと同筆に見えることである。また薄墨界線の濃さや太さも一致しているようである。その点ルは本来チリヌと同一の卷子本であり、チリヌに近接する本文だったと考えられはしないだろうか。ルについて「「美作国住人」が登場し、海に臨む戦場であるところから、屋島か一谷の合戦の一部ではないかと想像される」と指摘されているのも（松尾論）、そうした見方の傍証になるであろうか。

(参考) 八幡愚童訓断簡 後崇光院筆 大四半切 室町時代前期写 台紙貼 1葉*

やや厚手の楮紙（縦26.9、横17.4糎）に10行書写。『新撰古筆名葉集』後崇光院の項「巻物切 縁起真名カナ交リ」に相当する。しかし管見の範囲では卷子本の明証を示す断簡はなく、袋綴冊子本から切り出されたものかと思われる。手沢から推して、丁のウラ面か。伝尊円親王筆金沢文庫切（『万葉集』）・今川了俊筆伊予切（『源氏物語』）も、名葉集に「巻物」と記録されながら、原態は大型冊子本であったことが確かめられているので、その類例と見たい。

丸みを帯びた特色ある書は、伝称通り後崇光院貞成親王（1372～1456）の筆跡と認められる。巻上の比較的巻頭に近い部分を写した、堂々たる風格の断簡である。甲類Bに分類され（小野尚志『八幡愚童訓諸本研究』）、当該作品本文研究の重要資料と言える。筆者を特定出来る点は、掲出断簡の特色の一つ。

8 平家物語 零本 巻一・二存 室町時代末期写 袋綴 2冊

藍色無地紙表紙、縦27.7、横21.7糎。傷み多く補修を加えるも原表紙か。中央に蠟染外題を押し「平家物語 巻一（二）」と墨書、巻一本文と同筆のようである。内題同じ。毎半葉8行17字程度、漢字平仮名交じり、巻1と2とは別手で、巻1の方が老筆らしい。目録なく章段ごとに改行しないで書き通す形式。内容は通常に分巻と同じく、巻1内裏炎上、巻2蘇武までを写す。

全巻にわたる朱の書き入れあり。これは少なくとも2段階に及び、早い時期に章段の始まりを示す合点と章段名、遅れて片仮名傍訓・合符等を記す。章段の区切れは必ずしも諸本と一致しない。

横幅を大きくとった堂々たる写本で、覚一本系本文を持つ。室町時代の伝本として貴重だが、巻三以下を欠くのが惜まれる。

III 目録をめぐって

9 本朝書策目録 無注本 江戸時代写 宝玲文庫旧蔵 卷子本 1軸

現存最古の国書目録とされるもの。建治3年（1277）以降、永仁2年（1294）以前の成立。編纂には中原氏が関与していたか。

伝本は書名と数量表示のみの無注本と、編著者や成立事情などに関する注記を伴う有注本とに大別される。有注本はさらに永仁2年奥書本・康安2年奥書本などに細分される。現存伝本のほとんどは有注本に属している。

一方、無注本に該当するのは、従来知られていた中では、国立国会図書館本と東洋文庫岩崎文庫本だけだった。そこに近年加えられたのが当該本である。ほか未調査であるが、『天理図書館稀書目録 第五』記載の1本も無注本の可能性がある。

当該本は消墨色無地後補表紙。縦31.5、横48糎前後の料紙12紙継ぎ、全長580糎。フランク・ホーレーの「宝玲文庫」の朱印あり。江戸時代の写本であるが、鎌倉時代末期～南北朝時代あたりの古写本を模写したものとおぼしく、実質的な現存最古写本となる。ただし破損箇所が少々あるほか、末尾の書目40点（ちょうど1紙分に該当）を欠いてもいるため、国会本などで補う必要がある。

有注本との間には少ないながらも看過できない本文異同が見出される。特に注目されるのは、有注本に較べて、無注本の数量表示が「巻」「帙」「帖」「冊」「結」とより具体的になっている点である。これは無注本が古態を保っていることと同時に、本目録が当時実在の書目に基づき編纂されていたことを示すのではなかろうか。さらに言えば、いわゆる『通憲入道蔵書目録』との一部書目の一致から、編纂の際対象とされた書目の中には、

天皇家もしくは朝廷ゆかりの蔵書が含まれていた可能性も考えられるようである。

10 五合書籍目録 平安時代末期～鎌倉時代初期写 卷子本1軸

書写年代当時におそらくは実在していた、某所（寺院か）の蔵書の目録であろう。香色無地後補表紙。料紙7紙継ぎ、縦27.2、横全長234糎。第1紙に見出し「法花経疏」の書目9点、第2紙に「顕章疏」12点、第3紙に「俱舎」6点、第4～5紙に「伝記」21点、第6～7紙に「講式」13点がそれぞれ記載されている。全文一筆のようにみられる。一方、端裏書には「法花疏 顕章疏 ~~二合目六~~ 俱舎 伝記 講式 五合目録」とあり、抹消線及び「俱舎」以下は別筆。当初は第1～2紙の「二合」分のみであり、それに基づき端裏書も記されていたところ、のちに何らかの事情によって第3紙以降が継ぎ足されて「五合」分となったため、端裏書も訂正されたということか。なお第2紙と第3紙の境目、及び第5紙と第6紙の境目で、虫損の間隔が不自然となっているので、多少の改修が施されているようである。

各書目には数量のほか、構成（「上中下」など）・性格（「書」「摺」「唐書」など）・撰者その他に関する注記が付される場合がある。中に「俱舎論本頌三卷 上中下 有注先師御注也」とある「先師」は、目録編者にとっての先師だろうから、具体的な書目に基づく目録という見通しの傍証となろう。その俱舎論本頌有注本の出現も期待したい。

記載書目中には「法花経釈文三帖 上中下 中算撰」「法花経音義一帖 匡房作」「寂昭往反消息一通」などがあり、それぞれの意義を池田利夫が指摘している（『古典籍と古筆切』1994年）。また「伝記」「講式」については牧野和夫が翻刻・考察を行っている（『日本中世の説話・書物のネットワーク』2009年、『和漢比較文学叢書14 説話文学と漢文学』1994年）。今もうひとつ触れておけば、「伝記」中「三宝感應録」について、後藤昭雄は日本感霊要略録と同書と認めているようであるが（『金剛寺本『三宝感應要略』の研究』2007年）、本当に完全に同書かどうか、「要略」の有無の違いが気になる。また後藤が指摘するように、東大寺の宗性上人に「三宝感應録并日本法花伝指示抄指示抄」という著作がある（東大寺蔵）。一方、本目録の「伝記」には「法花伝五帖」とあり、あるいは宗性が取り上げた「日本法花伝」と同書ではなかろうかとも考えられる。そうであれば、今日佚書となっている「法花伝」の佚文を、「三宝感應録并日本法花伝指示抄指示抄」から拾える可能性もあろうか、などとも想像されよう。

11 高山寺聖教目録 享保8年（1723）常暎写 高野山明王院旧蔵 袋綴2冊

高山寺聖教目録、及びその補遺たる高山寺聖教目録甲乙録外（ともに同寺現蔵）からの派生本。

鳥の子色無地表紙、縦27.1、横20.3糎。一冊目、オモテ表紙左下に「二」と墨書。外題・内題とも「高山寺聖教目録甲乙録外」。全7丁（遊紙なし）。本奥書「右甲乙録外聖教自一百／二至一百廿九合新加之／寛永十年十一月廿一日記了之」「校合了（朱）」。二冊目、オモテ表紙左下に「三」と墨書。外題「高山寺顕聖教目録」、内題「高山寺聖教目録」。全29丁（遊紙なし）。本奥書「右一卷以古目録写之朱書分新／加之用捨讓再校之時而已／寛永十年十一月廿一日」。また各冊とも書写奥書「梅尾聖教目録全七卷昔日修善院懷英／明王院秀憲等之両三師於仁和寺書写／之以為当山祖師堂之蔵本焉弊師

／明王院常暎指三四子令謄写之者也其微意備于志学之人之看也皆星次癸卯／享保八年春二
月光熒■雲誌」。なお各冊オモテ表紙右下に「金剛峯寺／本中院谷／明王院」の黒印あり。

建長二年（1250）撰進という高山寺聖教目録（現蔵本が原本か）は、寛永10年（1633）に転写本が作成され、また「同時にそれに洩れている聖教」についても「「甲乙録外」と副題して目録化」された（『高山寺資料叢書14高山寺経蔵古目録』奥田勲解題、1985年）。その際の転写本、及び甲乙録外の原本も高山寺に現蔵されており、『高山寺経蔵典籍文書目録第一』（『資料叢書3』1973年）の「高山寺聖教類 第一部」に193〔6〕〔7〕として掲出されている。そこに示されている寛永10年の奥書が、当該本各冊の本奥書とほぼ完全に一致するので、当該本はそれら寛永10年本からの派生本であると知られる。

派生の経緯は、当該本の享保8年書写奥書に詳しい。まず「修善院懐英」「明王院秀憲」らが、寛永10年本を仁和寺において転写し（とすると、仁和寺に寛永10年本の転写本がすでにあったか）「当山祖師堂」に納めた。次いで「明王院常暎」が、その祖師堂本を謄写させて後学に供した。それがすなわち当該本ということになる。当該本の蔵書印から、「明王院」は高野山別格本山明王院を指すものと判断され、従って「修善院」「当山祖師堂」も高野山のそれであろうと類推される。高山寺聖教目録が諸寺院において享受されていた様相が垣間見られる興味深い資料と言えよう。

ちなみに当該本は2冊存だが、同書写奥書には「梅尾聖教目録全七卷」とあり、確かに前掲『典籍文書目録第一』にも、寛永年間奥書を持つ（あるいは関連すると推定される）江戸時代初期写の聖教目録が7点記載されている（193〔2〕～〔4〕・〔6〕～〔9〕）。おそらく当該本は、かつてはこれら7点を写した7冊本だったのだろう。オモテ表紙の「二」「三」の墨書は、その7冊本のうちの2～3冊目だったことを示していると思われる。